

伝寂蓮筆本系『大江千里集』の考察

坂本美樹

1 はじめに

『大江千里集』（以下、「千里集」と表記する）の伝本は、（1）流布本系統と（2）異本系統の二系統に大別される。これら二系統の大きな違いとそれぞれの特徴について、『新編国歌大観』^①の「千里集」解題（木越隆氏担当）では次のように述べられている。

この二系統の大きな違いは、流布本系統には、句題のない和歌が一首あり、また欠字等もあるが、異本系統には句題がすべてあり（巻末の一〇首は別）、欠字もないことである。異本系統には重出歌が一首（二四・七二）あるが、流布本系統に比べれば、体裁の整った本文である。勅撰集、

私撰集等の千里の歌は、この異本系統の引用がほとんどであり、古くは、大江千里の歌集として大いに利用されていたらしい。しかし、中世頃から、流布本系統の本文のほが多く読まれていたようだ。

解題でも述べられているように「異本系統には句題がすべて」存在し「欠字もない」点から、金子彦二郎氏は異本系統の書陵部本を最善本とされ、以降、金子氏の論が踏襲されてきた。それに対し橋本不美男氏は「句題が整備されているからといって、伝存経路の明らかでない書陵部本を最善本とすることは危険であろう」と述べられ、流布本系統の原型を探ることの必要性を提言された。この流れを受けて、藏中さやか氏（二〇〇〇）^②は、歌順の点から、異本系統よりも流布本系統である伝寂蓮筆本が

原態に近いことを示された。近年、冷泉家時雨亭叢書より書陵部本の祖本と考えられる本が紹介されたことにより、これらの論には再考の余地があるが、本稿では扱わないこととする。

さて、このたび稿者は、岡山市にある林原美術館にて、流布本系統のなかでも伝寂蓮筆本系に属すと思われる「千里集」を新たに三本確認した⁵⁾。伝寂蓮筆本と推定される理由は、当該三本の書写奥書に「寂蓮法師自筆本」をもって書写した旨が記されているからである。前述のとおり、流布本系統の中でも主軸をになう伝寂蓮筆本系統の整理、分類は大変重要な課題である。また、流布本系統の諸伝本は、現在のところ書写年代を特定できるものは少なく、書写年代が明確になっているものでも、遡ることができるのは一六六七年までであった⁶⁾。しかし、今回確認された該本三本のうち、一本は明暦四年（一六五五）に書写された旨が記されており、一六六七年を十二年も遡る写本である点が注目される。また、残り二本も伝寂蓮筆本との関係性が示されていることから、「千里集」の本文研究および享受史の観点から、林原美術館本は大変重要な資料であると考えられる。

よって本稿は、林原美術館蔵「千里集」三本の本文系統を明らかにし、系統内の整理を行なうことを目的とする。さらに、該本三本が「千里集」においてどのような位置づけにある伝本

なのかについても考察を試みたい。

2 林原美術館蔵「千里集」三本の書誌

本章では、林原美術館蔵「千里集」の三本の書誌を紹介する。なお、書誌の紹介は所蔵番号順におこなう。

① 池田光政筆本

所蔵番号【書跡⁵⁾】。卷子本。一軸。タテの長さは二五・〇cmで、ヨコは一紙につき約四〇cmで、十五枚の紙をつぐ。外題は打ち付け書きで「大江千里集」とある。表紙は若葉色の料紙に金泥銀泥で薄と萩を描き、金銀の野毛や箔を散らした贅沢な仕様となっている。見返しもまた、金泥で雲と霞、銀泥で草花を描いている。本文は斐楮混漉の紙を使用。和歌は上下句分かち書きにし、墨筆による書入れがみられる。序文末尾には「寛平六年四月二十五日／散位従五位上大江朝臣千里」と記されている。また、該本は巻末に「寂蓮法師以自筆本書写之畢」という書写奥書を有する。函の中央に「光政公御筆」と題が打ち付け書きにされ、さらに右上に「光政公御筆」と書かれた貼紙がある。また、包紙にも「光政公御筆／大江千里集」と書かれて

いることから、該本を「池田光政筆本」と呼称する。総歌数一二五首。内題、序文、「春」、「夏」、「秋」、「冬」、「風月」、「遊覧」、「雑部」、「述懐」、「詠懐」、書写奥書の順に構成されている。

② 池田綱政筆 明暦四年本

所蔵番号【書跡530-1】。綴葉装。小四ツ半。一冊。タテ一八・四cm×ヨコ一三・二cm。表紙は土色の布地に緑の糸で草花が刺繍されている。外題なし。内題に「大江千里集」とある。料紙には鳥の子を使用し、見返しは本文共紙。墨付き二十五丁、後に遊紙三丁の全二十八丁からなる。一面七〜八行書きで、和歌は基本的に上下句分ち書きにしているが、所々句またがりの箇所が存在する。朱筆と墨筆による書入れがみられる。序文末尾には「寛平六年四月二十五日／散位従五位上大江朝臣千里」と記されている。また、該本も書跡563と同様、巻末に書写奥書を有しているが、「寂蓮法師以自筆本／書写之畢文字等少々不／審疑姑俟善本者也／干時明暦四歲文月念三」と書写年月日まではつきりと記されている点に①との違いがある。なお、三本のうち、奥書に書写年次が記されているのは該本のみである。「函と包紙に「綱政公御筆」と書かれており、さらに書写奥書に「明暦四年」とあることから、該本を「池田綱政筆 明暦四年本」

と呼称する。総歌数一二五首。内題、序文、「春」、「夏」、「秋」、「冬」、「風月」、「遊覧」、「雑部」、「述懐」、「詠懐」、書写奥書の順に構成されている。

③ 池田綱政筆 延宝五年本

所蔵番号【書跡570-1-1】。綴葉装。枳型本。タテ一六・二cm×ヨコ一六・〇cm。表紙は伽羅色に金で霞引きをし、金銀の切箔が散らされている。外題は青朽葉色の題籤に墨筆で「大江千里集」と書く。見返しには表紙と同様に金銀の桐箔と野毛が散らされている。料紙は斐楮混漉。墨付二十五丁、後に遊紙三丁を置いた全二十八丁。一面八行書きで、和歌は上下句分ち書きにする。墨筆による書入れがみられる。序文末尾には「寛平六年四月二十五日／散位従五位上大江朝臣千里」と記されている。また、書写奥書には「寂蓮法師以自筆本／書写之畢」とあり、①と同様、書写年は記されていない。しかしながら、表紙の装丁と紙の共通性から該本とセットで制作されたと考えられる一本の奥書に「延宝」卯三曆神無月廿日」とあり、この書写年を参考にするならば、該本は570-1の二十二年後に書写されたと推定されよう。右記の理由と「綱政公御筆 御綴物」と書かれた函に入っている点から、該本を「池田綱政筆 延宝五年

本」と呼称する。総歌数一二五首。内題、序文、「春」、「夏」、「秋」、「冬」、「風月」、「遊覧」、「雑部」、「述懐」、「詠懐」、書写奥書の順に構成されている。

以上が林原美術館本三本の書誌である。これらをふまえ、次章では三本の本文系統について検討する。

3 林原美術館蔵「千里集」三本の本文系統

林原美術館本三本は、どれも書写奥書を有しており、「寂蓮法師自筆本」をもって書写したと記されている。第3章では、はじめに藏中さやか氏（二〇〇〇）の研究をもとに、流布本系統諸伝本の分類を整理し、次に、本文異同から林原美術館本がどの系統に属すかを検証する。

3-1 流布本系統の分類について

藏中氏（二〇〇〇）は、これまで伝寂蓮筆本と群書類従本系に分類されてきた流布本系統を次のように再分類された。

(1) 「四月二十五日本」系

別本：総歌数は巻頭二首を欠いた一二三首で、巻末に「建暦元年正月日 定家」とある。「春」部から「秋」部にかけて、錯簡による歌順錯乱あり。

A：「伝寂蓮筆益田本」に極めて近いもの。

B：「文保二年六月四日」付の「参議藤」による奥書と増補歌群をもつもの（＝文保奥書本系）。

(2) 「四月二十七日本」系

C：二条為忠筆本を祖本にするもの。

C'：小沢芦庵本の転写本。

D：今井似閑本として伝わってきたもの。

(1) (2) の分類の基準については、「千里集」序文末尾の日付によっている。これらの分類のうち、林原美術館本は三本とも序文末尾の日付が「四月二十五日」になっていることから、(1) 「四月二十五日本」系に属すと考えられよう。さらに、藏中氏（二〇〇〇）は、(1) 「四月二十五日本」系に属す諸伝本を【表1】のように細分されている。

【表1】「四月廿五本」系の分類

分類	所蔵者	請求番号	題	序首	備考	A														
						a	b	c	d	e	f	a	b	c	d					
別本	高松宮旧蔵	二二一〇九一三 (国立歴史民俗博物館現蔵)	『大江千里集』	『大江千里集』	定家本透写・江戸初期の書写と推定															
	佐賀大	〇九四五一二	『大江千里集』	『大江千里集』	寂蓮本透写・鍋島直能・寛文七年十二月下流写															
	佐賀大	〇九五四一三	『大江千里集』	『大江千里集』	寂蓮本透写・鍋島直能・寛文八年初春念六写															
	今治市河野美術館 (旧西荘文庫)	三四七七八五四	『大江千里集』	『大江千里集』	寂蓮本写															
	彰考館	巳五〇六九一九	『千里集』	『大江千里集』	聖廟御集・是則集・公忠集・長能集・と合綴															
	島原図書館	松一三五一一	『大江千里集』	『大江千里集』	内題『大江千里奉進調集』・河村益根写															
	鶴舞図書館	河オ一三七	『江千里奉進集 全』	『進調章表』	版本															
	群書類従	巻第一七九和歌部三四	『大江千里句題和歌外』	『句題和歌』	群書類従本写・源正宣写・文政二年初秋写															
	多和文庫	五・七	『大江千里句題倭歌』	『句題和歌』	朗詠百首と合綴															
	大坂市大	九一・一三〇八 OEC (森文庫)	『句題和歌』	なし																
	神宮文庫	文三一〇五	『大江千里家集 全』	なし																
	岡山大	八ノ箱P九一／三一 (池田文庫)	『大江千里家集』	なし	宝暦四年季秋写															
	内閣文庫	二〇一五六六(林家旧蔵)	『大江千里詠草 全』	なし																
	彰考館	巳二・〇七・二〇六	『泉殿釣殿歌合』	なし	永正十年御会始と合綴															
	書陵部	一五〇・二一〇	『永祿奈良房歌合』	なし	永祿奈良房歌合・長綱百首と合綴															

※ 藏中(二〇〇〇)一〇頁～一頁の表をもとに作成。

分類Aのうち、a・b佐賀大本は書写奥書に「寂蓮法師自筆本」をもつて「不違字形透写之畢」と記されているが、藏中氏も指摘されているように、誤脱や誤写の箇所が数箇所あることから、書写態度に若干不審な点がある。しかしながら、分類Aのa・bは「伝寂蓮筆益田本」（以下、「伝寂蓮筆本」）の書写形式に極めて近く、また、表の中で、書写年代が明確な伝本のうち最も古い書写年代を有しているという点で、大変貴重な伝本である。Ac今治市河野美術館本もまた、奥書に「此一冊寂蓮法師自筆本命書写再三加校合畢」とあり、本文の面から「伝寂蓮筆本」に最も近い伝本である。その他、d・e・fも所々異同があるものの、比較的「伝寂蓮筆本」に近い本文を有している。以上のように、「伝寂蓮筆本」の本文に近いものが分類Aである。

分類Bは先述したとおり、「文保二年六月四日」付の奥書を有しているグループである。これまで群書類従本系が流布本の代表を担ってきたが、藏中氏が既に指摘されているように、類従本が属す分類Bは、伝本間の異同が多く類従本の本文と近いものはb・c以外に見出せない。藏中氏（二〇〇〇）は以上のような理由から、分類Bを「類従本系」ではなく「文保二年奥書本系」と称すべきであると提言された。本稿においても、その呼称を継承し、分類Bを「文保二年奥書本系」と呼ぶことと

する。

以上、流布本系統の分類について確認した。次章では、この分類に基づき、林原美術館本がどの分類に位置づけられるのか、そして分類内でのどのような関係性が指摘できるかについて考察していく。

3-2 伝寂蓮筆益田本と林原美術館本の関係

本稿では、「四月二十五日本」系内において林原美術館本が分類A、分類Bのどちらに属するのか検証をおこなう。なお、本文比較の際の底本として、十二世紀後半の書写と推定される「伝寂蓮筆本」（小松茂美『古筆学大成 第十七卷』に影印⁸）を用いる。

はじめに分類Bと比較してみよう。先にも述べたとおり、底本と分類Bの決定的な違いは、後者が「詠懐」部の後に「文保二年六月四日」付の「参議藤一」による奥書と増補歌群をもつ点である。この点について、稿者が林原美術館本三本を調査したところ、いずれも「文保二年」の奥書を持たず、また増補歌群も付記されていなかった。さらに、藏中（二〇〇〇）では、分類Bは底本と「詠懐」部の歌順が異なることが指摘されており、【表2】のように異同がまとめられている。

これについても調査したところ、【表2】にまとめられているような重出歌や欠題歌、歌順異同等は、林原美術館本にはみられなかった。以上のことから、林原美術館本は分類Bには属さないと考えられる。

ここで、林原美術館本が分類Bに属さないことを確認した上で、本文異同と書写形式の観点から、伝寂蓮筆本との関係を見ていこう。

明暦四年本との関係

はじめに、「池田綱政筆 明暦四年本」（以下、「明暦四年本」と呼称する）との関係をみていく。底本と明暦四年本の本文を比較したところ、詩題、歌本文に数箇所誤写、誤脱がみられたものの、いずれも墨筆による見せ消ちや補入記号によって本文を補っており、補った箇所については底本とすべて一致している。なお、見せ消ちや補入記号が施されている箇所は次のとおりである。

【表2】 B類本の「詠懐」部にみられる異同

B							分類	
h	g	f	e	d	c	b		a
書陵部	彰考館	内閣文庫	岡山大	神宮文庫	大坂市大	多和文庫	群書類従	伝本名
								総歌数
								底本の部立と歌番号
一一〇	一一一	一二三				一二五		春一九 (欠題歌)
「詠懐」にのみ有	「詠懐」にのみ有	「詠懐」にのみ有				「詠懐」に重出		秋五五 (欠題歌)
欠	欠	○				○		冬六六 (欠題歌)
欠	欠	○				○		遊覧八三
欠	○	○				○		遊覧九一 (欠題歌)
○	○	○				欠		雑九四
「詠懐」にのみ有	「詠懐」にのみ有	「詠懐」にのみ有				「詠懐」には無		述懐一〇六 (欠題歌)
欠	欠	欠				○		詠懐一二四

※ 藏中(二〇〇〇)一四頁の表をもとに作成。

凡例：(寂) 伝寂蓮筆益田本、(明) 明暦四年本

● 見せ消ちが施されている箇所

22番・歌

(寂) このめはるさかえこし(空白) たなれは
はなのかけとそなりまさりける

(明) このめはるさかひこし(空白) たなれは
はなのかけとそ成まさりけり

67番・歌

(寂) かくはかりおいぬとおもへはいまさらに
ひかりのすくる事もおほえす

(明) かくはかりおいぬる思へはいまさらに
ひかりのすくる事もおほえす

79番・歌

(寂) 雲もなくたには山さへはれゆけは
みつのいとこそあらたなりけれ

(明) 雲もなくたには山さへはれゆけは
みつのいとこそあらたなりけり

98番・歌

(寂) しらつゆはわかるゝことにたちつれと
きみともにごそゆきかくれぬれ

(明) しらくもはわかるゝことにたちつれと
きみともにごそゆきかくれぬれ

100番・歌

(寂) 人おくるともにはるさへすきぬれは
これかうらみはあまるなりけり

(明) 人おくるともにはるさへすきぬれは
これかうらみはあまり成けり

123番・歌

(寂) おもふことなくうくひすにつけたれは
いろもかはらぬわれひとりへ

(明) おもふことなくうくひすにつけたれば
いろもふはらぬわれひとりてへ本ま、

●誤脱による補入記号が施されている箇所

15番・歌

(寂) あかてのみすきゆく春をいかてかは
こゝろをいれておしまさるへき

(明) あ○てのみ過^かゆく春をいかてかは
こゝろをいれておしまさるへき

95番・詩題

(寂) 別後相思夢魂遠

(明) 別後相思○魂遠^夢

99番・歌

(寂) わかれての、ちもきみ、んと思へとも
これをいつれのときとかはみる

(明) わかれての、ちもきみ、んと思へとも
これをいつれのとき○かはみる^と

117番・歌

(寂) はることにあひてもあはぬわか身
かなはなのゆきのみふりまかひつ、

(明) はることにあひてもあはぬわか身
かなはなのゆき○ふりまかひつ、^{のゆ}

また、明暦四年本では、底本で見せ消ちされていた箇所を本文に取り込んでいくつがある。

●底本の見せ消ちを本文に取り込んでいる箇所
49番・歌

(寂) あきのよのさむみなきつ、ゆくかりは
しもをし^をのきてゆきかへるらん

(明) あきのよをさむみなきつ、行雁の

しもをしのきてゆきかへるらん

98番・歌 ※ 再掲

(寂) しらくもはわかる、ことにたちつれと

きみともにこそゆきかくれぬれ

(明) しらくもはわかる、ことにたちつれと

きみともにこそゆきかくれぬれ

特に注目すべきは98番歌で、明暦四年本では、はじめに第一句目を「しらくもは」と書いてしまったようであるが、後ほど「は」の箇所を「の」と見せ消ちしている。この見せ消ちから推察するに、「しらくも」までは底本の見せ消ちをもとに校訂して本文に取り込んだが、最後の「の」だけ見落としてしまい、そのまま「は」と書写してしまったものと思われる。「しらくもは」という本文を持つ伝本は伝寂蓮筆本、佐賀大本、そして異本系統のみであるが、後述するように、明暦四年本は書き入れの位置や書写形式から伝寂蓮筆本を祖本として書写したと考えられる。残念ながら、この時点では伝寂蓮筆本が親本であるとはつきり言えないが、とはいえこのような誤写が生じた理由

は、親本の本文が「しらくもは」となっていたことによるといえよう。

さらに、底本に写されている書き入れについて、検討したい。伝寂蓮筆本の序文には、末尾に千里の位階に関して、次のような勘注が存在する。

本云 如古今目六延木三年転

兵部大丞云々 此位署不審

藏中氏(二〇〇〇)も言及されているように、この勘注を留めている伝本は、別本の高松宮旧藏本、佐賀大本二本、今治市河野美術館本、鳥原図書館本、岡山大本、内閣文庫本の七本のみであり、うち鳥原図書館本、岡山大本、内閣文庫本は「本云」は欠落してしまっている。よって、勘注の原型を留めるのは実質四本のみである。明暦四年本にはこの勘注が存在し、しかも原型を留めたまま書写されている。一方、光政筆本、延宝五年本の二本については、この勘注は存在しない。さらに、底本には句題五つに漢字の発音等に関する注記が残されている。これについても明暦四年本には残っているが、光政筆本、延宝五年本には残されていないといった現象がみられる。後ほど言及す

るが、この現象は対校注記にもみられる。以上のような事情から、【表3】【表4】において、光政本、延宝五年本は注記項目すべてが「/（ナシ）」と表示されているので「留意いただきたい」。

さて、明暦四年本の句題にみえる漢字音等の注記について【表3】をみていこう。なお、表にはAに分類されているその他伝本も併せて表記した。句題5つにみえる漢字音等の注記は七つあり、すべて一致する伝本は、透写本とされる佐賀大本 a・bの二本しかない。明暦四年本は八六の「クワン」と一三の「生水」を欠くものの、それ以外はすべて底本と一致しており、その他の伝本の伝存状況を鑑みれば、底本に忠実に書写されていると考えてよいであろう。しかも、同じく伝寂蓮筆本を転写したと考えられている河野美術館本と注記の箇所が一致していることも大いに注目される。

次に、【表4】をみていただきたい。これは、「或本」との対校注記の伝存状況についてまとめたものである。この注記は底本独自のもので、別本である高松宮旧蔵本には存在しない。さて、「或本」との対校注記は全部で六つあり、明暦四年本はすべて底本と一致している。底本独自の対校注記が一致しているということは、明暦四年本が底本から派生した伝本であるとい

えよう。さらに、123番歌の注記についても触れておきたい。

123番・歌 ※ 再掲

(寂) おもふことなくくひすにつけたれは

いろいろかはらぬわれひとりへ本マ、

(明) おもふことなくくひすにつけたれは

いろいろかはらぬわれひとりへ本マ、

123番歌の五句目をみると、寂蓮筆本では「われひとりへ」に「本マ、」という注記が付されている。この注記は、諸本内で異同が生じている。底本と同じ表記のものに、A佐賀大本 a・bの二本やA d彰考館本がある。明暦四年本と同じ表記のものは、A e島原図書館本と、「四月廿七日本」系の大阪市大本・三手文庫本の三本である。A c河野美術館本は、結句の表記が明暦四年本と一緒にあるが、「本マ、」が欠落している。しかし河野美術館本には紺の墨で結句に点が付されており、親本に「本マ、」があったことを窺わせる。この注記に関して、藏中氏は123番歌の結句は「われひとりへ」↓「われひとりへ」↓「われひとりてん」というように誤写されていたと推察さ

れている。先述したように、明暦四年本は底本の見せ消し箇所をそのまま本文に取り込んでおり、123番歌についても注記である「本マ、」はそのまま残し、傍記されていた「て」を本文に

取り込んだという可能性が考えられる。底本での字配りや配置とは若干異なるものの、本文としては底本を継承していると考えてよいように思われる。

【表3】句題中の漢字音に関する注記の伝存

A						林原		分類
f	e	d	c	b	a	延宝五年本	光政筆本	
鶴舞図書館	島原図書館	彰考館	河野美術館	佐賀大	佐賀大			底本の注記 伝本名 明暦四年本
/	/	/	○	○	○	/	/	七六 厲 レイアヤウシ ハケム
/	/	/	○	○	○	/	/	八六 炊 條 ユルシ キン ハナヒル
"/	/	○	/	○	○	/	/	クワン 炊
/	"/	/	○	○	○	/	/	八九 瞻 ● センミル
/	/	/	○	○	○	/	○	一一二 瀧 ヲクアワ
/	/	○	/	○	○	/	/	生水
/	/	/	○	○	○	/	/	一二三 假 カリニ カカル

※ 藏中(二〇〇〇)二二頁の表をもとに作成。

【表4】「或本」との対校注記の伝存

分類	底本の注記		A					林原		
	伝本名	二三 無或本 二六 或本 四六 或本 五五 或本 連秋	f	e	d	c	b	a	延宝五年本	光政筆本
	明暦四年本	○	／	○	／	或本	○	○	／	／
	明暦四年本	○	／	○	／	或本	○	○	／	／
	明暦四年本	○	／	○	／	或本	○	○	／	／
	明暦四年本	○	／	○	／	或本	○	○	／	／
	明暦四年本	○	／	○	／	或本	○	○	／	／
	明暦四年本	○	／	○	／	或本	○	○	／	／
	明暦四年本	○	／	○	／	或本	○	○	／	／
	明暦四年本	○	／	○	／	或本	○	○	／	／
	明暦四年本	○	／	○	／	或本	○	○	／	／

※ 藏中(二〇〇〇)二二頁の表をもとに作成。

以上、本文異同から書き入れ注記までみてきたが、これらの結果から考えるに、明暦四年本は底本の伝寂蓮筆本と本文的に大変親しい関係性にあるとみてよからう。また、同じ転写本である河野美術館本とは書き入れ箇所も一致する点から、同じ親本から派生した伝本であると推察される。

次に、書写形式から明暦四年本と底本との関係を検証したい。明暦四年本は一面の行数や改行の位置から、底本と書写形式が

酷似していることが分かる。しかしながら、字母までは忠実に書写していない箇所がいくつか見受けられることから、底本を親本にした転写本であると考えられる。明暦四年本には、他にも底本を親本にして写したと思われる箇所が所々存在する。例えば、底本では22番歌の二句目から三句目にかけて次のような空白の箇所があるのだが、明暦四年本はその空白をそのまま受け継ぎ、さらに「本ノママ」と傍記している。

22番・歌 ※ 再掲

(寂) このめはるさかえこし(空白) たなれは
はなのかけとそなりまさりける

(明) このめはるさか^江ひこし(空白^{本ノママ}) たなれは
はなのかけとそ成^江まさりけり

また、底本では、72・76・77・124番歌の四首で句またがりが見え、その部分もまったく同じ改行の仕方^江で書写されている。これらは底本を除いて、透写本である佐賀大本 a・b にしかみられないことから、明暦四年本がいかに底本に親しい伝本であるかということを示す一つの証拠になると思われる。

以上、本文異同や書写形式から底本との関係性をみてきた。結論として、明暦四年本は透写本ではないものの、底本を大変忠実に転写した伝本であることが明らかとなった。つまり、明暦四年本は「四月二十五日本」系のなかでも、分類Aに属すと考えてよいであろう。

光政筆本と延宝五年本

光政筆本と延宝五年本は、序文末尾の書き入れと底本独自の注記を欠くものの、本文に関しては伝寂蓮筆本とほとんど一致する。しかしながら、両者は、伝寂蓮筆本を忠実に書写した明暦四年本を親本に他本と校合した本であると考えられる。稿者は以前、同じく林原美術館に収められている『隣女和歌集』巻一の三本について、次のように考察した。

……以上のことから、林原美術館本3本について、次のような関係が推測される。はじめに、光政が寛文12年6月に作者自筆本をもって「隣女集」巻一を書写し、その5カ月後、十一月書写本を書写した。十一月書写本はさらに勅撰集に採歌された歌の校訂もおこなわれた。その後、光政の息子である綱政は、まず十一月書写本を底本に書写を試み、

本文に問題がある箇所については、六月書写本をもって校訂した、という流れである。⁹⁾

【図1】林原美術館蔵「隣女集」3本の成立過程



林原美術館本「千里集」三本の書き入れと本文の異同から、該本三本についてもまた、先に書写した本で校合したことが想定されるのである。

それでは、まず本文をみていこう。光政筆本、延宝五年本では、22番の詩題について、次のような共通する独自本文が存在する。

凡例：(寂) 寂蓮筆本、(光) 光政筆本、(延) 延宝五年本
22番・詩題

(寂) 春條長定夏陰盛

(光) 春條長出夏陰盛

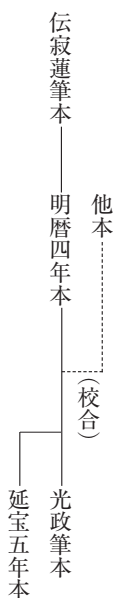
(延) 春條長出夏陰盛

22番の詩題で、底本は「長定」とあるのに対し、光政本、延宝五年本では「長出」となっている。これは、どの諸伝本にも見出すことのできない本文である。よって、光政筆本、延宝五年本は親本を同じくする伝本であるといえる。さて、明暦四年は、底本と同じ「長定」となっているが、「定」の横に「出」の異体字がみえることから、光政本、延宝五年本を書写する際に「出」と写してしまったのではないかと推察される。明暦四年本独自の書き入れが、該本二本の本文に採用されている例はいくつかみられる。例えば、3番の詩題「偷閑何処無尋春」の「何」について、明暦四年本は底本の字体のまま写しているため「仁」のようにみえるのだが、傍書に「何」と書き入れが施されている。該当箇所について、光政本、延宝五年本では「何」と明確に表記され、見間違えないような工夫が施されている。また、底本では65番の詩題が「霜々未殺妻々草」となっているのに対し、光政本、延宝五年本では「霄霜未殺妻々草」という独自本文になっているのであるが、これについても明暦四年本の詩題の傍書に朱筆で「霄霜カ」といった書き入れがあることから、明暦四年本の書き入れを採用したと考えられる。このような例は他にも序文や76番、77番、86番、89番に見受けられる。これら明暦四年本の書き入れがいったいどの本に拠っているかについて

は、現在のところ不明である。以上のような異同から、光政筆本、延宝五年本は本文的には伝寂蓮筆本に属すと考えてよいが、書き入れからその親本は明暦四年本であり、本文を他本で校合した上で書写された写本であると考えられる。

以上、林原美術館本三本の本文系統を検討した。その結果、三本は四月二十五日本系統のなかでも、伝寂蓮筆本系統に極めて近い本文を有していることが確認された。また、該本三本の成立は書き入れや本文の異同から、次のような過程をたどったものと考えられる。

【図2】林原美術館蔵「千里集」三本の成立過程



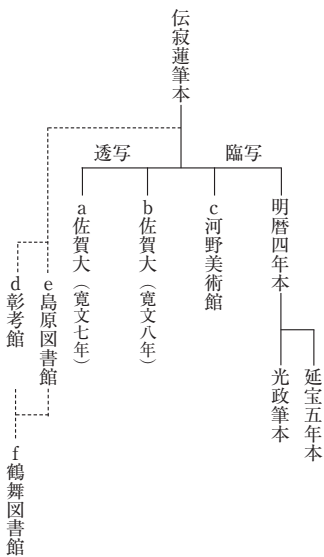
それでは次に、分類Aに属す林原美術館本が、系統内でのどのような位置にある伝本かについて、考察していく。

4 分類A内における林原美術館本の位置づけ

前章にて、林原美術館本が伝叙連筆本に極めて近いとされる分類Aに属すことを確認した。本章では、林原美術館本三本のうち、二本の親本になっていると考えられる明暦四年本が分類A内でのように位置づけられるかを明らかにする。第3章でも述べたとおり、「四月廿五日本」系は、序文末尾の千里の位階に関する勘注と底本の注記の伝存状況から細分化することが可能である。ふたたび【表3】をみてみよう。これらの表で明らかのように、明暦四年本は二三の注記以外、すべて河野美術館本と一致している。なお、藏中氏（二〇〇〇）は河野美術館本の二三の注記について、「或本」の上に一字分の空白有。」と注記され、もとは「無或本」であった可能性を示唆されている。稿者も河野美術館本の原本を拝見し、たしかに「或本」の上部分に一字分の空白を確認したが、一字分削ったような痕跡は見つけられなかった。よって、この部分に関しては、河野美術館本の誤写であるのか、それとも親本の欠落によるものなのか定かではない。次に、【表4】をみてみよう。【表4】をみて明らかのように、明暦四年本の書き入れ箇所は完全に河野美術館本と一致している。また、本文についても両者の間に異同は

みられない。一方、佐賀大本の二本については、26番歌の注記を二本とも欠いており、さらに55番の「或本」と「連秋」という注記に関して、b佐賀大本では54番と55番に分けて書写されている点が明暦四年本と対立する。また、本文についても107番の詩題の欠如や118番歌二句目の異同等、所々、明暦四年本と対立する本文が存在する。また、e島原図書館本、f彰考館本についても、本文異同が多いことから、同じ系統でないと考える。以上の検証から、明暦四年本は、佐賀大本よりも河野美術館本と同じグループに属すと考えてよいであろう。よって、林原美術館本は分類A内において【図3】のように位置づけられると考えられる。

【図3】 分類Aの書承関係



【図3】に示したように、分類Aは伝寂蓮筆本を親本として、透写本と転写本に分類される。そのなかで、明暦四年本は転写本系に属し、さらにその下に光政筆本、延宝五年本が配置される。

また、林原美術館本は転写本でありながら、底本を忠実に書写しており、透写本であるとされる佐賀大本の本文を補うことができる点で、分類A内において大変重要な位置にある伝本であると考えてよいであろう。

5 おわりに

本稿では、「千里集」について新たに確認された林原美術館蔵の三本の伝本について、その本文系統を明らかにし、「千里集」諸伝本のなかでどのように位置づけられるかについて考察した。結果、林原美術館本は流布本系統の伝寂蓮筆益田本から派生したものであり、さらに、池田綱政筆明暦四年本については、伝寂蓮筆本のなかでも書写年代が最も古く伝来もはっきりしている点から、流布資料的価値の高い伝本であるといえよう。また、その他二本についても、流布本系統の書写活動をかきまみることができると大変貴重な資料である。今回の考察では、林

原美術館本以外の諸伝本、特に河野美術館本や佐賀大本との関係性について詳細な考察までいたらなかったが、それについては今後の課題としたい。

〔注〕

- (1) 日本Web図書館（和歌&俳諧ライブラリー）
- (2) 金子彦二郎『平安時代文学と白氏文集 増補版 句題和歌・千載佳句』培風館刊（一九五五年）
- (3) 橋本不美男「流布本『大江千里集』（句題和歌）の原型について」『王朝和歌資料と論考』笠間書院（一九九二年）
- (4) 蔵中さやか『題詠に関する本文の研究大江千里集・和歌一字抄』おうふう（二〇〇〇年）
- (5) なお、光政筆本については、石坂善次郎編『池田光政公伝 下』東京印刷株式会社（一九三二年）の二二七頁にて既に紹介されている。また、岡山藩主池田家に所蔵されていた調度品を整理した『調度記』（明治期に作成）の「書画之部」懸物四「三十八」にも「綱政公御筆」として二冊の「千里集」が記録されている。岡山藩池田家の文化財管理の詳細については、浅利尚民氏「旧岡山藩主池田家の近代における文化財管理の実態について」『林原美術館紀要・年報』三号

(二〇〇九年)を参照されたい。

(6) 藏中(二〇〇〇)、一三頁。

(7) 藏中(二〇〇〇)、一五頁。

(8) 小松茂美『古筆学大成第十七卷』四二二頁。

……本の大きさは、たて一六・〇センチメートル、よこ

一・五センチメートル。雲紙を交用して、墨付二十七丁、

前後に遊紙各一丁を置いた冊子本である。(中略)……しか

し十二世紀後半から十三世紀初頭の書写である「伝寂蓮筆雲

紙本朗詠集切」(一)(二)(三)(四)(本大成第十五卷35)

などの趣致は、この「伝寂蓮筆千里集」に共通するもので

ある。となると自然、この「千里集」も平安時代末期、十二

世紀後半ころの書写に推定するのが妥当ということにもなる

のである。

(9) 拙稿「隣女和歌集」巻一の基礎的考察『関西大学国文

学』一〇二号、関西大学国文学会(二〇一八年)、一一九頁。

(10) ちなみに、94番・詩題「悠々一別巳三年」について、底

本では二文字目が判読できない状況であり、佐賀大本では虫

損を示す線を記入しているが、林原美術館本では三本とも

「悠々一別巳三年」と書写している。

〔付記〕本稿は、平成三十年十二月一日に開かれた和歌文学会
関西例会での口頭発表に基づくものである。発表時、種々御
教示くださった方々に厚く御礼申し上げます。また、このたび
閲覧を許可してくださった林原美術館、今治市河野美術館の
皆様にも厚く御礼申し上げます。

(さかもと みき／本学大学院生)